

聖大木曜日 「聖体機密について」

「餅^{パン}は人の心を養う」（聖詠 103 : 15）と、預言者は神妙なるパンについて預言している。その餅^{パン}は、身体を養い強める普通のパンと違って、人の心を養い強めるものである。我々の心は、まさに強められることを必要としている。陥罪時に極めて弱くなり、自力では立ち直ることができなくなった我々の心は、絶えずありとあらゆる諸慾に冒される。陥罪して目が眩んだ人間は虚しくも意志強固を自認しているが、その強固さはどこにあるというのか。罪に支配される意志は罪に犯され、罪に流されてしまう。弱ってしまった人の心を強め、養うために、預言せられた神妙なるパンが、まさに必要なのである。

人の心を養うのは「天より^{くだ}降りし餅^{パン}」、「生命^{いのち}の餅^{パン}」（イオアン 6 : 58、48）である。そのパンとは、我が主イイスス・ハリストスである。「我は天より降りし生ける餅^{パン}なり、この餅を食らう者は世々に生きん。我が与えんとする餅は、即ち我の体^{たい}なり、我が世^{いのち}の生命の為に与えんとするものなり。我が体^{たい}を食らい、我が血を飲む者は、我に居り、我も彼に居るなり」（イオアン 6 : 51 56）と主は言われた。

何と神妙なる定めであろうか。超自然的な、悟り難い定めを前に、人知が当惑することも無理からぬことである。肉の思いと不信心によって目が眩まされた人たちは、この定めを耳にすると、神から神聖なる定めについて説明を受けようと

もせず、この定めについて自分の判断を下し、その判断は彼等の断罪と滅びをもたらすものとなった。「難^{かた}い哉^{かな}この言^{ことば}、誰^{たれ}か之を聴くを得ん」¹（イオアン 6 : 60）と彼等は言ったのである。「是よりその門徒（有名無実の門徒）多く返りて、復^{また}彼^{とも}と偕に行かざりき」²（イオアン 6 : 66）。現在も、ハリストス教の外面上の慣習に従いながら、生き方と心ではハリストス教と無縁な人たちは、この大いなる機密について懐疑心に駆られる。もし「この言」を口にしたのが人間であったならば、それはまさに「難い」もので、それに従うことは不可能だったであろう。だが、この言葉を口にしたのは、限りなき慈しみによって人々を救うために人性を受けた、神であった。したがって、この言葉は慈しみに満ちているはずである。それを口にしたのは、人々を救うために人性を受けた神である。したがって、この言葉をなおざりにしたり、それについて浅はかな判断を下したりしてはならない。信をもって、心底から言葉を受け入れ、それに従わなければならない。信をもって、心底から、人となった神を受け入れなければならないことと同様である。神が人性を受けたことは、人々にとって

¹ 「弟子たちのうちの多くの者は、これを聞いて言った、『これは、ひどい言葉だ。だれがそんなことを聞いておられようか』。」

² 「それ以来、多くの弟子たちは去って行って、もはやイエスと行動を共にしなかった。」

悟り難いことである。神人の定めと行為は、同じく悟り難いものである。それらは、不法において孕まれ、罪において生れた人、永遠の滅びに定められ、地獄の牢と深淵で永遠の苦痛を味わう運命にある人を、神に結合させ、恩寵による神と為し、また永遠に天に住い、永遠の福樂を享受するために天上に上らせてくれる。神人の言葉と定めを裁き、それを拒絶した人たちは、「神^{しん}」(「靈」)であり「生命^{いのち}」である言葉³、ハリストスの弟子に「神^{しん}」と「生命」を与える定めを裁き、拒絶した。「我誠に誠に爾等に語り、爾等若し人の子の体を食らわず、その血を飲まずば、己の衷に生命を有たざらん」(イオアン6:53)と主は言われた。

聖金口イオアンは言っている。「聖体機密の神妙なる性質と働きとは如何なるものであるかを学ぶべし。すなわち、聖体とは何か、何のために与えられているか、何の益をもたらすか。我々は、我が主イイスス・ハリストスの体と一体であり、その「肉の肉」、その「骨の骨」(創世記2:23)である。奥義を教わった者たちよ、言っていることに耳を傾けよ。すなわち、我々は愛によってのみならず、機密そのものによって主の至聖なる体と一つになる。至聖なる主の体は我々の食物となるのである！主は、我々をどれほど愛しているかを示そうと、我々にその食物を与えてくださった。主は我々と交ざり、また御自分の体を我々の内に交

³ 「我が爾等に語りし言は神(しん)なり、生命なり」(イオアン6:63)。

ぜ入れた。胴体が首とつながっているように、我々が主とつながるためである。これこそ、言い難き愛の表われである。このことにおいて、イオフが主を預象している。イオフの僕のうち、特に彼を慕った者たちは、イオフへの大いなる愛情を表すために、『我等、得べくば彼の肉身を以て飽き足を願う』(イオフ記31:31)と言っていたものである。まさしくそれを我々に賜わったのが、ハリストスである。主は我々を至上の愛に招き入れ、御自分の愛を我々に表している。その愛によって、希望さえあれば、人は主を観るのみならず、主に触れ、主を食べ、主と体合し、全ての願いを叶えてもらうことができるのである」(イオアン福音の講話、第46訓戒)。

我々は原祖アダムより死のために生れるが、主は我々のためにアダムの代りに原祖となって、我々がアダムから受け継いだ血肉の代りに、御自分の聖体尊血を与えてくださる。神が人となることによって人が贖われた営みを敬虔に観想すれば、上述した主の行為は、悟り難く超自然的なことでありつつも、同時に明らかで、納得の行くこととなる。陥罪して捨てられしものとなった人の本性に属する不当な我々の血肉は、神人によって新たにせられた本性においては、神人の聖体尊血によって取って代わられなければならないのである。(シリアの聖イサアク、第68説教)

「仁慈にして、至仁、至慈なる神は、仁慈そのものである方として、その測り難く豊かなる仁慈によって、その本性である至善がそのままあって、それに与る^{あずか}

者が誰もいないなどということ許さなかった」⁴と、ダマスクの聖イオアンが深い神学を述べている。かくの如きが、聖神の光によって照らされた人の知が神の業を観る目である。かくの如きが、そうした知による、神の業の解釈である。かくの如く、そのような知を持つ人が己のために神の業を説明する。神の業とその起因を正確に、且つ完全にはっきりと知り得るのは、神のみである。上より光照せられた人知は、次の聖言を発する⁵。太陽がその光線によって触れる物体に映るように、至善、すなわち神の本性が他の存在（被造物）に映ることを、神は嘉せられた。そのために、神は先ず霊と霊界を創り、次に物質界を創った。そしてついに、魂では霊界に属し、魂の衣である身体では物質界に属する人間を創った。生命そのものである神は、御自分の中から、万物に生命を注いだ。世界の生命は、自主の生命である神が世界に御自分を反映させたことにある。霊も、人間も、その他の万物も、創造主の手によって造られたとき、皆完全なものであった。その完全さは被造物の限られた本性に見合ったものであったが、全き善に満ちており、悪は一滴も入っていなかった。被造物の限られた完全さは、創造主のみの特質であるこの上ない完全さの反映であった。霊と人間は、被造物の中でも、特に鮮明に創造主が映し出された、神の反映となった。創造主は、彼等の本性そのものに

⁴ ダマスクの聖イオアン「正教信仰の鑑」第4部、第13章。

⁵ 「正教信仰の鑑」第4部、第13章より借用。

御自分の像を描いた。そして、神の性質に似た性質によって、その像を飾った。神は善である。有知の被造物をも、神は善なる者として造った。神は叡智である。有知の被造物をも、神は叡智ある者として造った。また、特に際立った類似点として、神は有知の被造物に御自分の聖神を賜わり、それによって被造物の全存在を御自分に合一した。

悪は、有知の被造物の自由意志によってできた。己の内に悪を孕み、それを産み出したのは、霊たちであった。彼等は、人類の根源である原祖に神と同等な状態を約束して彼をだまし、彼に悪を移して、悪の病毒を全人類にもたらした。ここに、驚くべき神の仁慈がある。人類を陥罪と滅びから救い出すために、三位一体の神はその一位によって人性を受け、御自分によって、また御自分のうちに人間を新たにし、それによって人間に御自分との合一を賜わる。この合一は、創造時に賜わった合一と比べ物にならないほど密接なものである。本性による神の子は、人となり、人々の元祖となることによって、人々を恩寵による神の子となした。陥罪後人々が服した、動物を思わせる懐妊と誕生は、放棄せられる。つまり、洗礼を受けるときに聖神より生れることによって、それらはいわばカバーされるのである。新たに生れた人々は、肉から神^{しん}に生まれ変わる。「肉より生れし者は肉なり、神^{しん}より生れし者は神^{しん}なり」（イオアン3：6）。ハリストティアニンは、アダムから死のために生れたが、洗礼によって生命のために生れ、神から生れ、もはや神の子として生れる（イオアン

1 : 1 2 1 3)。ハリストティアニンの生は「復生^{ふくせい}」(マトフェイ19 : 28)、
「重生^{ちようせい}」(ティト書3 : 5)と呼ばれ、まさに「復生^{また}きる」、「重ねて生きる」ことである。その生は永遠の生命のための生であり、死のための生とは全く違うものである。それは、陥罪で第一の生を失った後再び与えられた、第二の生である。復生の状態のためには、それにふさわしい食べ物が与えられた。復生のために生れるとは聖神から生れることであると同様に、新たにせられた人に与えられる糧も、聖神によって用意せられる。その糧とは、神人の体と血である。「主の身体は、生命を施す神^{しん}°である。生命を施す聖神により孕まれたからである。これを言っているのは、肉体としての本性を否定するためではなく、それがいかに神聖なものであり、いかに生命を施すものであるかを明示したいからである」(「正教信仰の鑑」第4部、第13章)とダマスクの聖イオアンは言っている。

神人は、至って完全なる神でありながら、外面上、陥罪によって封印せられた五官にとっては、ただの人であった。洗礼によって神の子となり、神^{しん}°となり、更に神に適った生き方によってその子であり、神°たる状態を保ち、それを成長させた聖なる人たちは、陥罪によって封印せられた外面上の五官にとっては、他の人々と何ら変わらない、ただの人であった。ハリストスの聖体機密は、神人の体と血であり、神^{しん}°でありながら、人の感覚にとっては、外面上パンと葡萄酒の形を保っている。目で見てもパンと葡萄酒にしか見えないし、匂いを嗅いでもパ

ンと葡萄酒の匂いしかなしいし、触れてみてもパンと葡萄酒の感触しかなしいし、食べてみてもパンと葡萄酒の味しかなしい。

聖体尊血がその実体を明らかにするのはその働き、その効果によってである。同様に、人性に覆われた神⁶がその神たることが明らかになったのも、その働き、その行動によってである。同様に、聖神°の器である聖人も、その働き、その行動によって、その聖人たることが明らかになったものである。外面上、己をどこまでも低くし、素朴で、人の目を惹くようなところが全くなく、それでいてその働きは超自然的で神聖なるものがあつた。このような、感嘆に値する謙虚な外面は、神聖なる働きによって、その価値が更に高くなる。まさしくその通りである。神は、人となり地上で生活することによってこの上なく己を低くせられた。その全ての働き、行動はこの上なく謙遜に満ち、その謙遜においてこの上なく美しく、厳かである。このことは、聖体機密についても言える。新しくせられた人たちが領ける食事、聖神°が食べられ、神人が食べられる、不思議な、神妙なる、畏るべきこの食事ほど、外面上謙虚で何の変哲もない食事はあるだろうか。

「我が体を食ひ、我が血を飲む者、我を食う者は世々に生きん」(イオアン6 : 56 58)と主は言われた。「聖体尊血を領ける人たちは、ハリストスの王服をまとい、属神°の剣を佩びて、天使や天使首、天軍と同位に立っている。これ

⁶ 人性を取った主イイスス・ハリストス。

でも、まだ何も大したことを言っていないも同然である。なぜなら、彼等は王なる神ご自身を身にまとっているからである」(聖金口イオアン「イオアン福音の講話」第46訓戒)と偉大な聖師父は言った。旧約では、預象的な献祭を定めるに当って、火で炙った肉を食べてもよいとされ、血を食べることは禁じられた。この禁止の理由は、「蓋し凡その肉体の生命(魂)はその血にあり」(レヴィト記17:11)ということであった。旧約の献祭が薄い影として預象した新約の祭り(主イイスス・ハリストス)が献ぜられた後、同時に生け贄であり祭り主でもあった主によってその祭りが献ぜられた後は、献祭の血に関して別の命令が神から発せられた。すなわち、「皆之を飲め、蓋し是れ我の新約の血」(イオアン26:27-28)と、主は衆人を招き、衆人に命ぜられる。全ての人がハリストスの血を飲むようにと招かれている！招かれる理由は、上記の禁止の理由と同じである。すなわち、ハリストスの血にはその魂があるのである。御聖体を領聖するとき、ハリストスの魂が領聖者の魂に触れ、ハリストスの魂が領聖者の魂と一つになることが明らかに感じられる。ことばで諭されることなく、魂は、その陥罪した本性と縁遠い心の平和、柔和、謙遜、全ての人への愛、朽ちやすく移ろい行く物事への無関心、来世への関心を覚えるようになる。これらの思いは、ハリストスの魂からもたらされ、人の魂に植え付けられる。「我に学べ、我は心溫柔にして謙遜なればなり、爾等はその^{たましい}霊に安息を得ん」(マトフェイ11:29)と

主が言った通りである。階梯者聖イオアンは救世主のことばを説明して言う。「天使、人、書物から学ぶのではなく、我に学べ。すなわち、我が汝等に結合し、汝等のうちに輝き、働くことから、我が心、思い、考え方が溫柔にして謙遜であることを学ぶがよい。そうすれば、汝等は心内の戦いから安らぎを得、悪霊の領域からもたらされる思いによる心の重苦しさ^と混乱が和らげられ、汝等の魂は安息を得ん」⁷(『階梯』第25講話)。これが、聖体機密の作用、効果である。すなわち、主の聖体尊血は、我々に作用すると共に、見えずして休まざる我が敵である悪鬼に作用し、聖体尊血の器 - ふさわしい姿でそれを領ける人 - を悪鬼から守る。口で受ける、外面上物質的な食べ物は、霊に対して作用し、彼等をまるで鎖で縛るかのように束縛する。外面上パンと葡萄酒が与えられる食事は、悪霊と戦い、彼等を負かすのだ。

預言者は遠くからハリストス教の奉献台に指差し、「爾は我が敵の目前に於て我が為^{えん}に筵(食事)を設け給えり」(聖詠22:5)⁸と感動して神に叫んだ。このような聖体機密の効果の特^に知っているのは、無言の生活を送り、特に激しい悪鬼の思いの攻撃に侵される修道者たちである。「彼等は、悪意に満ちた魔鬼から毒を注がれて熱を出し、首を長くしてスポタ(土曜日)と主日を待っている。生ける水の泉(主の聖体尊血)のところに来て、それによって、敵に飲ませられ

⁷ ここでの階梯者聖イオアンのことばには、聖イグナチイによる解釈的な挿入がある。

⁸ この聖詠は領聖預備規程の時に読まれる。

た苦味から清められるためである」⁹と、聖大ピメンは自らの経験から語っている。

悪霊もまた御聖体の力を知っており、それを恐れ慄き、それを憎み、領聖者を妬む。その妬みようは、悪鬼にふさわしく凄まじいものがある。悪霊はしばしば、領聖の準備をしている信者に対して猛烈な攻撃を行ない、信者の思いを乱し、心を無関心で頑なな状態にさせ、重い罪の思い出や空想をもたらし、更に良心を汚し、信者を混乱させ、領聖をさせないよう努める。また、領聖後、同様に当惑と混乱に陥れ、信仰を揺るがし、御聖体など領けても何の役に立たないという思いを心に蒔こうと、しばしば同じ攻撃をする。悪霊が領聖者に対して起こすこの見えざる戦いは、聖体機密がいかに重要で有益であるかを物語っている。人が御聖体という宝物を手に入れようとするとき、人の敵が一生懸命それを阻み、猛獣の如く人からそれを奪おうとする。まさに、その宝物とは貴重極まりないものなのである。

信仰によって己を強くし、勇ましくわが敵に戦いを挑もう。領聖の準備をするに当って、できる限り警醒し、警戒することを努めよう。領聖後も、警醒・警戒を失わないよう努めよう。霊の襲来による心の嵐を恐れたり、心が憂いや混乱に陥ることを許したりしないことだ。雲が消え去り、晴れた空に日が出るように、

忍耐強い行者の心に、御聖体の効果は必ず出る。「我が目は私の敵を見たり」(聖詠53:9)と、その敵による心の混乱が過ぎ去った後、聖ダヴィドは言った。聖体尊血を領聖した人も、御聖体の働きによって領聖者の心にとってよりはっきりと見えるようになる霊の攻撃から解放されて、己について同じことを告げるであろう。

然るべき準備をしてから、畏敬の心と信仰をもって、注意を払って領聖した人は皆、領聖直後ではないにしても、しばらく経ってから、自分に変化が起きたことを感じる。知と心に不思議な平和が降り、身体が穏やかさを帯び、顔に神の恩寵が印せられ、思いと心情は思慮なくあちこちさまよったり自由に罪に走ったりしないように神聖なる、霊的な縄目で縛られる。常日頃、敬虔で注意深い生き方をしていると、御聖体の働き、効果は更に明らかになり、豊かになる。聖書は、その働きを、^{こうべ}首(知)が^{あぶら}霊的な膏で潤されること、聖神およびハリストスからもたらされる心情を心に満ち溢れさせる爵に喩えている¹⁰。常日頃、注意深く敬虔な生活をしていると、天の糧を賜わることによって人々に与えられた、悟り難い神の慈しみと憐れみを、ある程度悟ることができるようになる。できるだけ頻繁に、できるだけふさわしい姿で領聖する者は、^{いのち}「生命ある日その^{いつくしみ}仁慈と^{あわれみ}慈憐とに伴わ

⁹ アルファベット順聖師父言行録。第19カフィズマ後の祝文には、「爾の尊き血によりて我が魂を楽しませ、仇敵が我に飲ませし苦味を消し給え」とある。

¹⁰ 訳注。「爾は我が敵の目前に於て我が筵を設け、我が首に膏を潤し、我が爵は満ち溢る。願わくは斯く爾の仁慈(いつくしみ)と慈憐(あわれみ)とは我が生命(いのち)ある日我に伴わん、然せば我多くの日主の家に居らん」(聖詠22:56)。

れ」、その超自然的な力によって救いを得、永遠に続く「多くの日」天上の「主の家に居る」（聖詠22：5-6）であろう。

物質的なパンは天の餅パン かたどを象り、葡萄酒は真の属神^oの飲物を象っている。物質的なパンと葡萄酒の働きは、ハリストスの聖体尊血の働きを象っている¹¹。パンを食べると、人に解り得ない方法で、そのパンは消化器官を通して身体に栄養を与える。それがどうやって行なわれているかは解らないし、測り難いが、その働きの結果が明らかであることから、その働きがあることは明らかである。葡萄酒の働きはパンの働きに似ているが、葡萄酒は主に血に作用する。葡萄酒は血液の状態に変化をきたす気体を体内に出し、血を通して知に、心に、魂に作用する。物質的なパンと葡萄酒は、物質的な作用をする。パンは体力を維持し、身体に栄養を与える。葡萄酒は血液に作用し、血液の働きを活発にさせ、パンと共に身体の栄養に貢献する。物質的な栄養の調達がない身体は、必然的に死に絶える。

属神^oのパンであるハリストスの聖体は人の心を養い、人の全存在を強くし、意志と知を強化し、魂と身体の欲求を正し、人が陥罪時に罹った慾という病から人の生来の性質を自由にしてくれる。属神^oの飲物は属神^oの糧の働きを助け、人の魂にハリストスの性質を伝える。ハリストスは、罪を除いて全ての人間の性質を受けた。ハリストスの人間としての魂の性質は罪によって損なわれておらず、

瑕なきものである。神性と一つとなっているから、その性質は神聖なるものである。ハリストスの血を飲む者の魂は、その神化せられた性質を飲むのである。

「物質的な葡萄酒がそれを飲む者の身体中に混合し、葡萄酒が彼の内にあり、彼も葡萄酒の内にあるが如く、ハリストスの血を飲む人は神性の神^oを飲み、（ハリストスの）完全なる魂に混合し、主の魂も彼に混合する。これによって聖とせられた人は、主にふさわしい者となる」（フィロカリア、第2巻、第92章）と聖マルコは言っている。

御聖体の領聖を避ける者はハリストスから遠ざかり、永遠の死によって冒された己の本性的のまま放任せられてしまう。人の内に、その知と心の内にある永遠の死を滅ぼすことができるのは、ハリストスのみである。主は、全能の神として、入り難い人の心の奥に入り、そこで死によって死を滅ぼす。これをしなければ、永遠の死は人の内に残り、永遠の滅びをもたらず起因として心の中に潜むであろう。そして、永遠の死を己の内に持っている者は、永遠の滅びを免れることは不可能である。

このようにみえてくると、いと仁慈なる主が、その至聖なる体血を領食し、それにて養われるようにと人々を招いていることは、何と自然で納得の行くことに思えるであろうか。その招きは極めて切々たるものがあり、同時に大いなる約束と大いなる警告を伴って告げられている。言い難いほど我々を愛する主は、己によって我々を救い、己が処罰を受けることによって我々の処罰の代りとし、我々の

¹¹ この考えは、ダマスクの聖イオアンの著作にある。

穢れた尊厳を己の至聖なる尊厳によって代えた。そして、やはりその言い難き愛で定められた神妙なる様式にしたがって、御聖体を頂くことによって己とこの上なく密接に体合するようにと我々を招いているのである。

主はこう言われる。「朽つる糧の為になか勞する勿れ、乃ち永遠の生命いのちに存する糧、人の子が爾等に与えんとするものの為に勞せよ」(イオアン6:27)。「我が父は爾等に眞の餅パンを天より与う。蓋し神の餅は天より降りて、世に生命を与うるものなり」(イオアン6:32-33)。「我は生命の餅なり」(イオアン6:48)。「我は天より降りし生ける餅なり、この餅を食らう者は世々に生きん。我が与えんとする餅は、即ち我の体たいなり、我が世の生命の為に与えんとするものなり」(イオアン6:51)。「我が体は眞に糧なり、我が血は眞に飲物なり」(イオアン6:55)。「我誠に誠に爾等につ語ぐ、爾等若し人の子の体を食らわず、その血を飲まずば、己の衷うちに生命を有たざらん」(イオアン6:53)。

聖体機密は、毎日与るべしと定められている(「新碑書」)。ここに、ハリステアニンが毎日ハリストスの生命に与ることによって毎日靈的に生き返る、という意図が込められている。「頻繁に生命に与ることは、他でもない、頻繁に生き返ることである」と聖大ワシリイは言っている(高貴なるケサリヤへの第90書簡、第3巻)。頻繁に領聖することは、他でもない、己の内に神人の性質を新たにし、その性質によって己を新たにすることである。その新たなる状態は、常に

維持され養われていれば、身につくようになる。それによって、陥罪で身につけてしまった「古き人」の状態が滅ぼされる。ハリストスの内にあり、ハリストスから流れ出る永遠の生命によって、永遠の死は勝たれ滅ぼされて、ハリストスたる生命は人の内に宿る。

神の言葉には特別な働きがあるが、御聖体も同じ特別な働きを持っている。それも全く自然なことである。神の言葉では、神・父をもとにハリストスと聖神が協力し合いつつ働いている。御聖体においても、父と子と聖神の一体なる聖三者は同じように働きをするからである。その働きとはいかなることか、偉大なる聖使徒パヴェルは語っている。「神の言ことばは生きて能ちからあり、凡その両刃の剣もろはよりも利く、刺して、靈及び神きんせつ、筋節及び骨髓の間を刮さくに至り、且つ心の意と念とを鑑察かんさつす」(エウレイ書4:12)。御聖体についても同じことが言える。「我々を凡その穢れより清め、凡その害悪から守るために、御聖体は我々の本質の奥まで入る。もしも我々が持っている黄金が偽物であると判明すれば、来世において世と共に定罪せられないために、御聖体は裁きの火によって我々の黄金を清める。すなわち、病気や様々な災難を与えることによって我々を清めるのである」とダマスクの聖イオアンは言っている(「正教信仰の鑑」)。領聖する者は、御聖体を領けることによって、聖使徒のことばを借りれば「己の為に裁きを食らい飲む」(コリンフ前書11:29)ことを知るべきである。その裁きは、神に適って生きている者を義とし、靈的な賜を豊

かに与える。神に適ったことを十分にしていないうちは、その過ちを裁かれ、過ちを改めて永遠の罰を免れるために暫時の罰を受ける。また、自由にハリストスの誠めに反した罪の生き方をしながら、敢えて御聖体を領ける者は、その裁きによって恐るべき処罰を下される。

このため、御聖体を頂こうとする者は、細心の注意を払って念入りな準備をするようにと誠められている。「人自ら省みて、然る後この餅より食らい、この爵より飲むべし」(コリント前書 11:28)と聖使徒は言っている。すなわち、内省を深め、己を注意深く省み、分析しなければならない。また、己を罪から清め、告解と悔改によって己の内から罪を根絶しなければならない。少しでもハリストスの誠めの道からそれていることがあれば、過ちを改め、正しい道に立ち返り、一生懸命その道からそれないように努めることを心に決め、更に神の言葉を読み学び、心から神に祈り、頻りに御聖体を頂くことによってその決心を堅めなければならない。人間の卑小さ、貧しさ、罪深さ、陥罪状態を省み、一方、神の偉大さ、我々のために甘んじて身にて処刑を受け、血を流してくださった救主の言い難き慈しみ、御自分の体血で我々を養い、その養いによって御自分との密接な体合を我々に与えてくださる救主の愛を見極めなければならない。このように己を省み、見極めることによって痛悔の心が生じ、ハリストス信者は己の不当さを深く自覚し、それによって宜しきに合いて(つまり、ふさわしい姿で)御聖体を頂く準備ができることになる。そのような内省

は、領聖預備規程の中で聖師父によって祈りの形で書かれている。本当の自分を観ることができず、鈍感で頑なな状態にいる我々は、聖師父が作った領聖預備規程の祝文(祈禱文)の助けを借りて、我が救主が何よりも愛する謙遜の心を、婚宴の礼服の如く、魂にまとう。「自ら卑くする者は高くせられん」(ルカ 18:14)、「この餅を食らう者は世々に生きん」(イオアン 6:51)と救世主は言われた。

宜しきに合いて(ふさわしい姿で)御聖体を領けることが可能なのは、常に敬虔な生活を送る場合、または罪の生活を心から悔恨してきっぱりとそれを改めた後のみである。後者の場合、聖なる教会の教えにしたがって痛悔機密を受けることによって己の悔い改めを表明し、確定しなければならない。神の言葉に照らされ導かれることなく、自分の知恵および、罪を好む心と肉体の思惑にしたがって、慎まらずに散漫と生きる信者は、有名無実のハリストス信者となり、しっかりと神と己を知り、御聖体とは何かをわきまえることができなくなり、それを領ける前に然るべき準備をし、領けた後は己を慎み、御聖体にふさわしい態度と心を持つことができなくなる。「宜しきに合わずして食らい飲む者は、己の為に定罪を食らい飲むなり、主の体を弁えざるを以てなり」(コリント前書 11:29)。「主の体を弁えない」こととは、御聖体を然るべく重要視せず、至高至聖の宝を領けるために己の器の準備をしないことである。救いをもたらす究極の宝は、言い難く聖なるものであるが故に、同時に

この上なく畏るべき宝でもある。もし慎み深くハリストスの誠めにしたがって生活し、細大漏らさずその誠めを行ない、誠めを犯すことがあっても痛悔によって入念に過ちを改めるのであれば、神の裁きが我々を罰することはなかったであろう。「若し我等己を弁えしならば、審きを受けざりしならん」(コリンフ前書 11:31)。ふさわしくない姿で御聖体を領けることは神の裁きをもたらし、軽率な態度とあまり善良でない生き方の人に罰が降される。もっとも、この神罰は、過ぎ行くこの世において人に罰を与えることによって、永世において救いを得させることを意図とする、憐れみに満ちたものである。「審せられて、主より懲しを受く、世と共に定罪せられざらん為なり」(コリンフ前書 11:32)。聖使徒パヴェルは、コリンフの信徒が神に適った生き方を十分にせず、ふさわしくない姿で御聖体を領けていたが故に受けた神罰を次のように数え上げる。「此に縁りて(すなわち、ふさわしくない領聖のため)爾等の中に弱き者及び病む者多く、寝る者(つまり、死ぬ者)も少なからず」(コリンフ前書 11:32)。

故意に罪の生活をほしいままにしている場合、死罪¹²に陥った場合、信仰を持たなかったり、または邪信(誤った信仰)を持ったりする場合、そのまま御聖体を領けるならば、話はまた別である。そうした状態で領聖する者は、改めさせるための罰ではなく、最終的な罰および永遠

の苦しみを招く犯罪をおかず¹³。この犯罪は、主に侮辱を浴びせ、その頬を打ち、その顔に唾し、残忍に鞭打ち、釘で十字架につけることによってその身体を苦しめ、ついに神人を殺した人たちの犯罪に等しい¹⁴。「宜しきに合わずして、この餅を食らい、或いは主の爵を飲む者は、主の体と血とに罪を負うなり」(コリンフ前書 11:27)と偉大なるパヴェルは言っている。そういった者は「乃ち恐れて審判を待つこと、及び敵を食まんとする烈火あるのみ。若しモイセイの律法に背きし者が、二三人の証者ありて、恤みなく死に処せられれば、況や神の子を踏み、自ら聖にせられし約の血を聖なりとせず、恩寵の神を侮る者は、その人の受くべき罰、更に重きこと幾何なりと意うか」(エウレイ書 10:27-29)。「人自ら省みて、然る後この餅より食らい、この爵より飲むべし」(コリンフ前書 11:28)。つまり人は、御聖体を領ける前に、己を省みなければならない。そして、もし罪の汚れに溺れているならば、そのまま畏るべき領聖をしてはならない。ハリストスの聖体尊血を辱め、ハリストスを辱めるといふ最も重い罪を犯すことで罪に罪を重ねないためである。不遜にも神の子の婚宴にあずかる前に、先ず己の魂の衣をきちんとすべきである。悔改・痛悔をすれば、それがどのような罪のしみで汚れていたとしても、言い尽くされぬ主の憐れみによってそのしみは洗われ清められて、領聖は可能となるので

¹² 訳注。「死罪」とは魂に死をもたらず罪の意で、殺人、盗み、邪淫等のような大罪のことである。

¹³ ダマスクの聖イオアン「正教信仰の鑑」。

¹⁴ 聖金口イオアン「イオアン福音の講話」第46訓戒。ダマスクの聖イオアン「正教信仰の鑑」。

ある。

克肖なる聖マルコ苦行者は次のように指摘している。「種蒔きと刈入れとの間に或る程度の時間が置かれている。これが、我々が報いを信じない理由である」（「靈法について」第118章）。ふさわしくない姿で領聖する者は、ほとんど皆この種の不信心が特徴である。そういった人は、罪の悪臭の内にながらにしてハリストスの御聖体を領け、領けた後また罪をほしいままにしても、^{てきめん}靦面に天罰が降されないと見て、罰など当たることはないと思っている。何と間違った結論であろうか。イウデヤ人は、神殺しの罪の故に決定的な天罰が予言されていた。だが、それが実際に降されたのは、身の毛もよだつ犯罪を犯してから数十年経った後である。言い尽くされぬ神の^{じれん}慈憐と^{かんじん}寛忍は、まだイウデヤ人の悔改を待っていたのである。その慈憐と寛忍は、我々の悔改をも待っている。神罰は何回も先延ばしにされるが、悔い改めず、故意に罪に徹する人は必ずやそれを受けることになる。目に見える神罰の最初とは、突然死、または痛悔の機会を奪ってしまうような病気による死である。本格的な神罰が降されるのは、死後の世界においてである。「自ら欺く勿れ、神は^{あなど}慢^べ可からず。人の種くところのものは、亦その^か穫るところと為らん。その肉に種く者は、肉より腐敗を穫り、神[°]に種く者は、神[°]より永遠の生命を穫らん」（ガラテヤ書6：7 8）と聖使徒は言っている。

^{エウハリスティア}聖体機密¹⁵が神人によって制定された

¹⁵ エウハリスティアとは、ギリシャ語で「感謝」

日時は、今日¹⁶、預象的なパスハを食べて晚餐があった後のことであり、主が我々に救いをもたらした受難に行く前のことである。晚餐の参加者は、十二使徒であった。聖大木曜日、この偉大なる出来事を記憶し祝う聖なる教会は、通常と違って午後に聖体礼儀のために信徒を集める¹⁷。主が第一回目に機密を行ない、その体血を飲食することを勧めたときと同じ時刻に、聖体機密の執行と聖体尊血の領聖が行なわれるためである。このようにして、機密の晚餐の状況が再現されることによって、この偉大なる出来事は生き生きとした印象を我々の心に残し、「爾等^{これ}此を行いて我を記念せよ」（コリンフ前書11：24）という主の命^{めい}は特に忠実に果たされる。

聖大ワシリイは、聖書と聖伝をもとに次のように叙述している。主は「己を世界の生命の為に^{わた}付しし夜、その自由にして永遠に記憶すべき生命を施すの死に出づるに臨みて、その聖にして至浄なる手に餅を取り、神・父に捧げ、感謝し、祝讚し、成聖し、^さ撃きて、その聖なる門徒及び使徒に与えて曰えり、取りて食らえ、是れ我が体、爾等の為に撃かるるもの、罪の赦しを得るを致す。同じく葡萄汁を盛る爵を取りて水を和し、感謝し、祝讚し、成聖して、その聖なる門徒及び使徒

の意。聖体機密（聖体礼儀）は、大いに神に感謝と讚美を捧げながら行なわれるから、このように呼ばれている。

¹⁶ 訳注。この講話は、聖大木曜日の聖体礼儀の説教となっており、「今日」とは聖大木曜日のことである。

¹⁷ 訳注。規則では、聖大木曜日の聖体礼儀は午後に行なわれることになっている。

に与えて曰えり、皆之を飲め、是我の新約の血、爾等及び衆くの人の為に流さるるもの、罪の赦しを得るを致す」（「奉事経」、聖大ワシリイ聖体礼儀）。

この体血は、神人が至聖なる童貞女によって取った、神人の真の体と血である。この体血は、真に神性と合わせられているものとして、神聖なるものである¹⁸。「昇天した体が天から降るのではなく、パンと葡萄酒そのものが神の体と血に変化する。それがどのようにして行なわれるかと問うならば、主が聖神^oによって聖なる生神女から己のために、かつ己の内に身体を生成したことと同様、それも聖神^oによって行なわれるとだけ知ればよい。これ以上、我々は何も知らないが、神の言葉が真実であり、全能であることだけは知っている。その働きの仕方は測り難いものである」（「正教信仰の鑑」）とダマスクの聖イオアンは言っている。

「爾等此を行いて我を記念せよ」と、救世主はその選ばれた弟子と共に秘密の晩餐のために部屋に引きこもり、彼等に言った。そして、主が命ぜられたことは、今日にいたるまで全世界で、正教会の全ての聖堂で、行なわれている。何と全能なる命令であろうか。静かな黄昏時、人目を忍んだ家の二階の別室で、救世主が己の運命を予告する数多の苦いことばを語り、己の死を控えた慎ましい晩餐のときに、何の変哲もない12人の漁師と税吏に言い渡されたこの命令は、何百年を通じ、何千年を通じ、全地で行なわれているのである。

¹⁸ ダマスクの聖イオアン「正教信仰の鑑」による。

聖体礼儀は、その全体を通し、主を記憶（回顧）する一連の儀式からなっている。パンと葡萄酒を成聖のために準備する儀式からして、その記憶から始まる。盛装した司祭は、聖体礼儀を始める前に、^{プロスコミディア}奉献礼儀を行なう。パンと葡萄酒を^{プロスフォラ}奉献し、それを聖体礼儀執行のために準備する儀式である。司祭は^{コビエ}供餅（聖パン）を取り、^{コビエ}聖戈で3回^{プロスフォラ}プロスフォラの上に十字架の聖号を画き、「主・神、我等の救世主イイスス・ハリストスを記憶するが為なり」（「奉事経」）ということばを3回繰り返す。次の動作のとき、司祭は、主が「羊の如く^{ほふ}屠らるるが為に^ひ牽かれたり、^{こひつじ}無てんの^{もくねん}羔がその毛を剪る者の前に在りて黙然たるが如く、彼は^か此く^{ごと}の若くその口を^{ひら}啓かず」（「奉事経」、イサイヤ書53：7）と言う。次に、主の受難のときの様々な出来事が記憶される。準備され、至聖なる記憶によって聖にせられたパンと葡萄酒は、「ハリストスの聖体血の真像」（「奉事経」、聖大ワシリイ聖体礼儀、ダマスクの聖イオアン「正教信仰の鑑」第4巻、第13章）という呼び方と意味を持たされる。

それから、聖体礼儀が始まる。主教品ないし司祭が聖神^oを呼び寄せ、それらの真像を成聖した後、ハリストスの聖体血の真像はハリストスの実の聖体血に聖変化する。この大いなる機密が行なわれる間、「主や、爾を崇め歌い、爾を讃め揚げ、爾に感謝し、我が神や、爾に禱る」という聖歌が歌われる。この歌は、機密の晩餐のとき、パンと葡萄酒が成聖され、主の体と血に変化するに当って、主が口にした祝讃、感謝、讃美のことばを再現

したものである。偉大なる機密が行なわれるに際して、それ以外のことばは考えられない。機密は測り難く、説明し難い。それを前にして、人の知も、天使の知も、畏敬の心を起こすべきであり、満ち溢れる畏敬の心の故に沈黙するべきである。何かのことばを口にしたとしても、それはただただ、畏敬の心に満ちた沈黙に等しい、感謝と讚美のことばでなければならぬ。賜がいかに貴重であり、高尚であり、神聖であるかは、神に感謝し、神を讚美することによってのみ、説明し難く説明され得るのである。

この機密の偉大さは、それに相当する義務を我々に負わせる。我々は、魂だけでなく、己の「身（身体）を（も）活ける聖なる祭、神に悦ばるるものとして献げ」（ロマ書 12 : 1）なければならぬのである。「身は主の為なり、主も亦身の為なり」（コリント前書 6 : 13）。「爾等の身はハリストスの肢なり」（コリント前書 6 : 15）と聖使徒は言っている。人間の使命は、霊体ともに神の殿¹⁹、神の器²⁰たることである。霊魂と身体は、その使命に応じて整えられていなければならない。サタナ²¹の感化に染まった魂は神を受け入れる器たり得ないのであり、不浄な欲望に支配される身体は神を受け入れる器たり得ない。このような霊体で神を受け入れることは神によって禁じられ、その禁止を犯す人には恐るべき刑罰が約束されている。神の禁止を踏み躪り、神の偉大さを踏み躪り、神ご自身を踏み

躪る者は、重大極まりない罪を犯すからである。

重さと罪の欲望から、身体を自由にしよう。怒り、金銭欲、虚栄心のような、専ら魂に属する諸慾からだけではなく、大食・美食、色欲のような、身体から魂に伝わる諸慾からも、魂を清めよう。霊に固有の汚れ、すなわち自己欺瞞、目が眩まされ、永遠の死によって死した状態をもたらす誤った思い、偽りの思い、神を汚す思いなどから、霊を清めよう。我々が自由の者となることができるのは、聖なる「真実」（イオアン 8 : 32）によってである。我々が清められ、自由の者となるのは、飲食を節制し、覚醒し、祈祷に立ち、伏拝し、視覚・触覚・聴覚など五官を慎むことによってである。五官を通して、好奇心や不注意によって罪が心に入り込み、霊体に汚れをもたらすからである。我々が清められ、自由の者となるのは、神の言葉によってである。神の言葉を読むことによって己を飽かしめ、神の言葉で告げられる主の旨と命にしたがって生きること、己の内に神の言葉を生きたものとしよう。我が救世主の受難、我々を永遠の死から贖った主の十字架上の死、その地上の生涯 - 常の謙遜と愛の具現であり、窮乏と患難に満ちた主の生涯 - を敬虔に顧み、頻りに心に浮かべるようにするがよい。思慮深く、神に適って我々の短い地上の旅を過ごそうという確固たる決意をしよう。永世のために己を準備し、神の審判のために備えることが、この人生という旅の目的でなければならない。この目的に適って人生を過ごすためには、入念に己を慎み、警醒

¹⁹ コリント後書 6 : 16 参照。

²⁰ フェサロニカ前書 4 : 4 参照。

²¹ 訳注。サタン、悪魔の意。

し、福音の教えにそって入念に己を整え、過失を痛悔によって入念に改めることが必要である。この世の諸子が有頂天になって人生を楽しみ、朽ちるべき物事を絶え間なく煩い、虚しいこの世に酔い痴れている状態は、恐ろしいことである。こういった状態は、永遠の亡びを孕んでいる。永遠の死は、既にその地獄のように暗く醜い口を開いて、自ら進んでその犠牲として己を捧げようとする者たちを呑み込もうとしている。そして、神の許しが尽き、罪人の悔改を待つ神の寛忍が終わり、悔い改めない罪人から神が最終的に離れようものなら、永遠の死は直ぐに彼等を噛み殺してしまうであろう。まさに恐ろしいとしか言えない状態に陥ることを懼れるがよい。現世にあつて、事前に全力を尽して我等の神に向かおう。永遠に神に結合し、その結合によって現世と永世にあつて我々の救いと福楽を得るためである。そういった生き方を常とすることによって、神に忠誠であることを証明すれば、神聖なる恩寵が我々に降臨し、我々の不安定な行を強化し、それを変容させ、新たなる、力強い、属神[°]の、天上の行を我々に与え、その行によって我々を速く成長させ、熟練させてくださる。己自身に属する行を修めるときでも（そうした人の行にも、顕わにはないが、恩寵は助力する）、神の役者は諸愆と戦いながらも、既にふさわしい姿でハリストスの体血を領聖する。ただし、自分がいかにふさわしくないかを完全に自覚することと、深い痛悔の心が、ふさわしい領聖の必要条件である。主の聖体血は、そうした神の役者の行、致命者的

といえる行に助力する。すなわち、その仁慈にして神聖なる裁きによって彼を罰し、清めることによって、彼自身が己の内に見ることもできなければ、根絶することもできない悪の汚れを焼き尽くし、根絶してくれるのである。行者に恩寵が降臨していれば、ハリストスの聖体血は彼に新しい生命を与え、彼がそれまで全く知らなかった新しい、属神[°]の、至高の思いを喚起させ、神聖なる奥義を悟らせ、聖神[°]の働きに満たしめ、謙遜の心を与えてくれる。その謙遜は、諸愆と悪霊の重圧による苦しみが原因の謙遜と比べ物にならないほど、深く、驚くべき心の平和をもたらすものである。「主に附く者は主と一神[°]と為るなり」（コリンフ前書6：17）。主は神[°]であり、主に附く人を御自分と体合させ、肉体を持ちつつも人を神[°]と為す。その人は主の神[°]から属性を受け、属神[°]の者となる。その際、癒えた傷からかさぶたがはがれるように、陥罪が人にもたらした獣の如き属性は彼を離れる。主との体合が始まるのは、福音の誠めにしたがって生き、痛悔の心をもって祈ることによってである。その体合が完成するのは神聖なる恩寵によってであり、ハリストスの聖体尊血を領けることによってである。

神の選民イスラエルがエジプトから約束の地に向って砂漠を旅するとき、神は天から降ってきたマンナを彼等に食として与えられた。「マンナを雨らして彼等の食となし、天の糧を彼等に与えたり。人は天使の糧を食らえり」（聖詠77：24 25）と聖書は言っている。この糧が預象したのは、種々多様な障害や苦

難に伴われて追放の地を旅し、天上の祖国に向って歩み上るハリストティアニンに、己の言葉²²、己の体血を食として与えるハリストスである。エジプトは、人間の陥罪の状態、罪と悪霊の奴隷となった状態を意味する。エジプトを出ることは、罪に生きることを捨て、ハリストスを信じ、ハリストスの誠めにしたがった生き方を始めることを表す。約束の地とは天であり、砂漠を旅することは地上の人生であり、天の糧とはハリストスのことである。「蓋し神の餅^{パン}は天より降りて、世に生命を与うるものなり」(イオアン6:33)。ハリストスは、新たなるイスラエルに向って旧きイスラエル²³についてこう言っている。「爾等の先祖は野に在りてマナを食らいたれども、死せり。夫れ天より降る餅は、乃ち之^{すなわ}を食らう者死せざるを致さん」(イオアン6:49)。そういった者は、現世にあって永遠の死によって死することもなければ、肉体の死によって魂が身体を離れた後も決して死することはない。アミン。

²² マトフェイ4:4参照。

²³ 訳注。新約のハリストティアニンと、旧約のユダヤ人のこと。

